

定年退職にあたって

山崎博子

平成十七年三月末日の定年退職を間近にして、何かメッセージを書くようにこのことなので赴任当時のことを思い出してみたい。

昭和五十五年（一九八〇）四月に跡見学園女子大学に一般教育の生物学担当者として着任した。

生物研究室には、文化学科で自然人類学をご担当の蒲原春一教授（元学長、現在、名誉教授）がいらつしやり、研究室の専任の助手には、本学国文学科卒業生の桑田恵美子（旧姓松本）さんがあれこれと細やかに協力していた。蒲原春一先生は昭和四十年の開学時から本学の教壇に立たれ、文科系大学の自然科学としての生物研究室に定められた標準設備をととのえられ、その管理維持に並々ならぬお力を注いでおられた。このことは、先生ご自身が旧文化学科会発行の『フォーラム』第九号に、お書きになっている。この生物研究室で、生物学の教育・研究、サクラの同定調査などのため、学生実習用顕微鏡や諸設備を今日まで使用できたことを心から感謝している。

最初、私は「生物学（A）」四クラスと「生物学（B）」二クラスを担当した。「生物学（A）」は講義のみのクラスで国文、美学美術史、英文、文化の学科ごとに大教室で行い、「生物学（B）」は講義のほかには生物学実験を含むクラスであり、生物実験室を使用した。「生物学（B）」は受講希望者が多く、設備等の関係からやむを得ず抽選で一クラス四十名とした。

跡見に来る前、慶応義塾大学商学部の非常勤講師として生物学を担当したことがある。そのころ、多くの大学では、文科系学生対象の自然科学系の科目は実験を通じて深く考えさせることが重視され、講義のほかに実

験が含まれていた。受講生たちは隔週に行われる生物学実験に興味を持ち、積極的に参加し、実験結果について熱心に質問した。ときには自分たちで新たな追加実験を行い、毎回充実したレポートを提出した。

この経験から将来、幼い子供たちと関わる人が多い本学学生たちに、生物学実験を通じて、生命現象に関心を持ち、生物学の立場から「いのち」の大切さを十分に考えてもらおう授業をしたいと考えていた。そして文学部の学生が興味を持つような生物学実験を創意工夫することに情熱がわき、「手と目と心で」を大切にしたいと考え、一生懸命になった。その準備と後片付けのガラス器具洗浄などで自分の時間と労力を少なからず費やしても、学生たちが生命現象の一端にふれ、新しく何かを知る喜びに輝く顔を見ると、また、新たな意欲がわいた。実験後に学生たちが作成したレポートには、一人ひとりの発見の喜びや「いのち」に対する考察が書かれ、次回の授業への工夫と準備に役立った。

「生物学(B)」では、メダカの卵の発生段階を顕微鏡で観察したことがある。胚に眼ができ、心臓が拍動を始め、その拍動に合わせて血管の中を血球が循環する様子などを見ていた学生が、突然、驚きの声をあげた。顕微鏡下で胚が一躍して卵膜外に出る——「孵化の瞬間」——を見たのだ。みんな代る代る、その顕微鏡を覗いて、孵化したばかりのメダカの稚魚に感激した。小さな胸びれが震えるように動いている。何人かの学生は自分で飼育したいと、卵と水草とを空のフィルムケースに入れて、大事に持って帰った。

学内のあちらこちらに、明るく、積極的で、生物学にも興味を持っている学生たちがいた。当時は、現在のグリーンホールの建物がなく、その場所にはクローバーが生えていた。お昼休みに教材用の四葉のクローバーを採りに行くと、近くにいた学生たちも一緒に探してくれて、すぐに「幸福」の葉が数枚も集まり、「なぜ、四葉になるの？」という質問攻めにあった。

校庭で巣から落ちた、スズメの子や巣立ち前のムクドリの子が、きれいなタオルやハンカチで温かく保護さ

れて、生物研究室に届けられたことが何度かあった。助けられた子に名前をつけて、家に連れて帰ったり、大学に持って来たりして大切に育てた。スズメの子は馴れはじめ、「ちやいちゃん」と話しかけると「チャイツ、チャイツ」と大きな声で答えた。鳥の声は人の声とほとんど同時に聞こえ、口を開けて餌をねだる姿に「可愛い！」——心ときめきするもの、雀の子飼^が（『枕草子』29段）——と、学生たちも大喜びだった。私は中西悟堂著の『野鳥と共に』（日新書院）を読みながら、子育てにあれこれ苦労した甲斐があり、幼い「いのち」が救われたことに感謝した。野鳥の雛の飼育を通じて「遺伝と環境」について学生とともに深く考えることが多く、貴重な経験をした。同様な経験については、雀のクラレンスを育てたクレア・キップスが著書（『スズメと私』——愛の記録12年——今田恵訳 創元社）に記している。

教職員の方々や学生たちは、新任で学内に不案内の私が何かと戸惑い、ためらいがちなのを見かねて、必要なことを温かく、優しく、教えてくれた。それまでは東京都立大学理学部生物学教室でガラス器具や機械に囲まれ、研究熱心で人付き合いの苦手な研究者たちと生化学の研究に日夜励んでいたから、跡見に来て「人を大切にする大学」であると深く感じ入った。そのときの印象については『 Blossom』vol.14に詳しく書かれている通りで、今も変わらない。

開学以来今日まで、緑豊かで手入れのよく行き届いた美しい、このキャンパスでは、大学のシンボルであるサクラが大切に維持されてきた。学生たちと一緒に目の高さに咲いているサクラの花に近寄って、その特徴を植物図鑑で調べているとほかの学生たちが寄ってきて、いつの間にか一緒に楽しいお花見？となった。

毎年、サクラはそれぞれの種類ごとに個性的な美しい色と形の花を咲かせている。ヤマザクラが多いのは跡見のサクラの特徴である。ヤマザクラは紅茶色の若葉の下にほほ白い花が咲いて、葉と花がお互いを引き立て合って美しく、それぞれの樹ごとに若葉の色、花の色、咲く時期も微妙に違っている。このキャンパスでは、

若葉がなく花だけが枝全体に豪華に咲くソメイヨシノよりも、ヤマザクラの方が美しく見える日々がある。

毎日、学生たちと構内の多種類のサクラを一本一本丹念に見ていると、不思議なことに、どのサクラの樹にも、必ず、ほかの樹よりも一段と美しく、サクラの花の「個性」が輝いて見える日がある。その樹の美しさは、わずか一日か二日のひとときに過ぎないこともあるが、その美しさに気づき、その美しさに心ひかれ、それをよく観た人の心にはいつまでも残る美しさである。この「個性」の輝きは多様なサクラのなかにあつてこそ、美しく映えるのである。

多種類のサクラの樹は花の季節に限らず、四季の折々に美しい姿でそれぞれの個性を輝かせる。

学生の皆さんが、大学と歩みをともしてきた多種多様なサクラを愉しみ、「心の豊かさ」を育て、「個性」を伸ばしていくことを切望して私のメッセージとしたい。

在職中に会った学生の方々、そして、教員、職員の方々に厚く御礼を申し上げます。皆様のご温情の中で二十五年間、楽しく教壇に立つことができ、深く感謝しております。蒲原春一先生のご退職後、長年に亘り、教育・研究に、生物研究室でご協力くださった松平暁子さん、吉田恵子さん、第三十一期卒業生の井澤栄子さんと、第三十四期卒業生の中山さとみ（旧姓原）さん、ありがとうございます。

児童文化研究部、マンドリンクラブ、跡見ウィンドオーケストラ、写真部の皆様には学内・学外の発表会や演奏会を通じて、美しく心豊かで貴重なひとときを、顧問として一緒に楽しませていただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

とりわけ、サクラが取り持つご縁で、多くの皆様から賜りましたご厚情に心から御礼申し上げます。

山崎博子 (やまざきひろこ)

生年月日

一九三四年八月二三日

現住所

東京都文京区本駒込六―六―二一

学歴

一九六一年三月 東京都立大学理学部生物学科卒業

一九六三年三月 東京都立大学大学院理学研究科遺伝学専攻修士課程修了

一九六七年三月 東京都立大学大学院理学研究科生理化学専攻博士課程単位取得満期退学

一九六七年四月―一九八〇年三月 東京都立大学研究生

一九六九年九月―一九七〇年三月 日本学術振興会奨励研究員

一九七二年九月 理学博士 (東京都立大学)



職歴

一九七二年四月 東京都済生会高等看護学院非常勤講師

一九七六年四月 慶応義塾大学商学部非常勤講師

一九七六年四月 国際商科大学教養学部非常勤講師

一九七七年四月 鶴見大学歯学部非常勤講師

一九七九年四月 国際商科大学商学部非常勤講師

一九八〇年四月 跡見学園女子大学助教

一九八七年四月 跡見学園女子大学教授

この間、国際商科大学非常勤講師をつとめ、東京都立大学客員
研究教授として、研究課題『昆虫外皮のフェノール酸化酵素に関
する研究』に従事した。

業績

【共著】

“MOLTING AND METAMORPHOSIS” (1990, 3, Japan Sci. Soc. Press)

【学術論文 (共著)】

Phenol oxidase activity and phenotypic expression of the melanotic tu-
mor strain tu⁸ in *Drosophila melanogaster*. (1968, 6, 18, Genetics
Vol.59)

「跡見学園女子大学におけるサクラの同定調査」(二〇〇四・三・

一五、跡見学園女子大学文学部紀要 第三七号)

【学術論文(単著)】

'The cuticular phenoloxidase in *Drosophila virilis*.' (1969. 12, J. Insect Physiol. Vol.15)

'Cuticular phenoloxidase from the silkworm, *Bombyx mori*: Properties, solubilization, and purification.' (1972. 12, Insect Biochemistry Vol.2, No.8)

'Laccase-type phenoloxidase in the cuticle of the silkworm, *Bombyx mori*.' (一九八九・三・一五, 研究報告 跡見学園女子大学一般教育紀要 第五号)

'Activation of laccase-type prophenoloxidase in the cuticle of insect. XV: Cuticular prolaccase of *Bombyx mori* and *Drosophila virilis*.' (1998. 12. 15, Zoological Science (Vol.15 Supplement))

'Laccase in larval cuticle of insect' (1999. 12. 15, Zoological Science (Vol.16 Supplement))

'Laccase-type prophenoloxidase in the cuticle of insects' (2000. 10, Pigment Cell Research (Vol.13, No.5))

【編集(共同)】

『跡見学園女子大学の桜 構内サクラガイド』(二〇〇四・三, 跡見学園女子大学)